こころ便り

第296号
令和6年11月

〒679-4343
兵庫県たつの市新宮町大屋六六八-十二
株式会社 新宮運送グループ
代表／木南 一志
kiminami@shingu.co.jp
電話 0791・75・1212

新宮運送ホームページ

国の行く末

還暦もずいぶんすぎて歳を重ねるごとに、将来この国はどうなっていくのだろうと案じることが増えている。そんなことより自分のことを心配しろという声は一旦置いておいて、学びを得てきた論語の中にも同じような言葉があって、人間は二千五百年たっても変わらないということが分かる。だから、そのままでいいというわけではない。

我が国の歴史を繙いていくと、何度も同じことを繰り返しながらも大切なものと変わるべきものをしっかりと受け継いできたことが分かる。実感することができるのが「米」である。書物もない神話の中に出てくる物語のようなことが、これだけ便利になった現代でも稲作を行ない、豊作を願い、お祭りをして、感謝していただいている。世界中で日本だけが続けてきたことは、百二十六代の天皇陛下を例に出すまでもなく、数えきれないくらいたくさんある。

「修身・斉家・治国・平天下」と教わった。自分自身をしっかりと磨き上げることで、安定した家をつくることができ、そういう人が増えていくことで国が収まる。結果として、平和な世の中となるのだ。

自分が全ての始まりと考えたなら、政治家のことを批判するだけでは意味がない。何を実行しているか、それも自分のためではなく「公」という世の中のために、人のためにである。

便利な世の中になったからこそ、原点に立ち戻って実行する時が来ているのだと私は考えている。トラックドライバーに「公の役割」がある。安全運転である。

当たり前だと笑われるかもしれないが、利益を求める前にやらなくてはならないことなのだ。営業マンも同じだ。電車の中でも席を譲るという仕事をするのは、若者ではない。サラリーマンこそ、先輩の老人たちに席を譲る。こんなことが当たり前にできたなら、きっと立派な国になっていくと思える。

子供たちも、そんな大人を見て、憧れる存在になるのだと容易に想像がつく。夢を描ける子供たちはそうやって育っていくのではないか。

大人たち、しっかり役立つ人になろう。

私も顔晴ります。

被災地にこころを寄せながら

木南 一志 拝

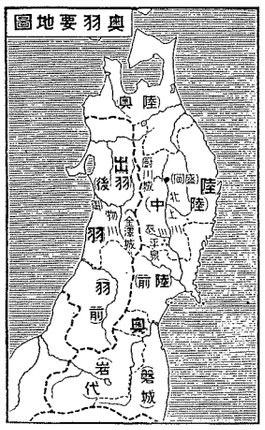
NPO法人 愛ランド様の協力で障害を持つ皆さんが宛名貼り、封入作業をしてお届けさせていただいております。

尋常小學國史 上巻

第十六 源義家 ②

まことに武士のなさけといふべし。それより遂に貞任等を厨川の城に圍みしが、賊は城中に高き櫓をかまへて、其の上より官軍をねらひうちしかば、官軍甚だ之になやめり。頼義すなはち兵士に命じ、人家をこぼちて堀をうづめ、又草を苅りて山の如く積みあげしめ、みづからは馬より下りて、はるかに京都の皇居を拜し、又石清水八幡宮に祈をこめ、火を取りて之を投げこみしに、大風にはかに吹きおこりて、火はたちまち城中にもえうつれり。賊軍は思の外のことなれば、上を下へとあわてさわげるを、頼義すかさず攻めよせて、遂に貞任等を斬り宗任等を捕へて、亂全く平ぎたり。世に之を前九年の役といふ。後頼義鎌倉に八幡宮を建てて神恩を謝したり。

前九年の役



義家京都にかへれる後、關白頼通の邸に至りて、戰の物語をしけるに、大江匡房これをたち聞きて、「義家は、大將になるべき才を持てども、惜しいかな、いまだ兵法を知らず。」といへり。義家の從者怒りて、かくと義家に告げしに、義家は少しも怒らず「もつともことなり。」とて、やがて匡房を師として兵法を學びたり。

義家兵法を學ぶ

さて奥羽の地方にては、さきに清原武則、頼義に從ひて安倍氏の亂を平げ、遂に安倍氏に代りて勢を得たりしが、白河天皇の御代に至りて、其の子孫の間に爭起りて、奥羽地方再びみだれたり。

奥羽地方再びみだる

つづく